

日本総合研究所主催シンポジウム 2021年12月3日 経団連会館、YouTube同時開催

第二部 パネルディスカッション

〈パネラー〉 三重大学地域イノベーション学研究科 教授 西村 訓弘 氏
京都大学大学院経済学研究科 教授 諸富 徹 氏
株式会社コラボラボ 代表取締役 横田 韶子 氏
〈モデレータ〉 株式会社日本総合研究所 調査部 上席主任研究員 藤波 匠

(藤波) それでは、第二部のパネルディスカッションを始めさせていただきます。第二部から、私、株式会社日本総合研究所・藤波が司会進行とモデレータ役を務めさせていただきます。よろしくお願ひいたします。

このパネルディスカッションでは、三つの大きなテーマを設定してお話を進めていきたいと考えております。デジタル社会における新しい価値創造、ダイバーシティ推進による人材活用、そしてポスト地方創生の視点、この三つの切り口で議論を進めてまいります。

では、パネリストの皆様、よろしくお願ひいたします。

[(1) デジタル社会における新しい価値創造]

早速、デジタル社会における新しい価値創造という議論に移りたいと思います。議論に移る前に、本日は、まず諸富さんと西村さんのほうから10分ずつ、パワーポイントを使いプレゼンテーションを行っていただきます。横田さんは二つ目のセッションで10分間のお話をいただくことになっております。



株式会社日本総合研究所 シンポジウム

人口減少の地域社会に求められる 新たな価値創造力

パネルディスカッション

次世代の国づくり

Copyright (C)2021 The Japan Research Institute, Limited. All Rights Reserved

パネルディスカッション 1

デジタル社会における新しい価値創造

次世代の国づくり

Copyright (C) 2021 The Japan Research Institute, Limited. All Rights Reserved.

では、諸富さんからお願ひいたします。

(諸富) 京都大学の諸富でございます。よろしくお願ひいたします。

私のほうからは、10分間で、これから話題となる地域の経済について、そもそもどのような変化が起きているのか、という視点でお話をさせてもらって、今後の経済を考えるうえでの土台のような話を提供したいと思います。



諸富教授

〔「経済の非物質化」とは何か〕

最初に、「経済の非物質化」という言葉を使うわけですけれども、典型的には、1970年代、80年代、地方を豊かにするためには、まずは製造業の工場を誘致し、それに加えて、大規模なインフラ、新幹線だと高速道路のような大規模な公共事業など、大きなプロジェクトを通じてお金を地域に落として豊かにしていく、そのような地域開発が盛んであったわけです。ところが、先ほども藤波さんからもプレゼンしていただいたように、地方からの人口の流出が止まらないわけです。開発をしてきたにもかかわらず、流出が止まらないということですね。

藤波さんから、一つは、とくに女性にターゲットを絞って、なぜ流出するのかということをお話しいただきました。そのなかで、女性がキャリア志向になり、地方に正規雇用のしっかりとした職がないというような問題提起がありました。現実に起きていることは、地域がこれまで割と製造業志向、インフラ志向で開発を進めてきて、実際それで地域を豊かにしてきたという実績がある一方で、現代社会においては、そこで提供される仕事と現実に働くとする人が就きたい仕事との間にミスマッチが生じているということだと思います。



京都大学
KYOTO UNIVERSITY

日本総研主催シンポジウム

人口減少の地域社会に求められる 新たな価値創造力

2021年12月3日(金)

諸富 徹(京都大学大学院経済学研究科
／地球環境学堂)

「経済の非物質化」とは何か

- 知識産業、脱工業化、ポスト資本主義
- 「非物質化」の定義
 - 1)生産と消費の両面で経済が、「物的なもの」から「非物質的なもの」へと重点移行
 - 2)「物的なもの」が「非物質的なもの」によって新たな価値を与えられ、経済が新しい発展段階へ至る
 - 3)「物的なもの」が消えてなくなるわけではない～「脱物質化」との区別
- 資本(投資)、労働、消費の無形化

1

その背景に、私は、ここに挙げているような、知識産業化であり、脱工業化であり、ピーター・ドラッカーが言っているような、いわゆるポスト資本主義というものの移行という形で起きてきている資本主義の変化と同じことが地域にも及んでいると考えております。恐らく女性は、その変化を先鋭的に先取りしているということではないでしょうか。

非物質化というのは、要は、典型的なものづくりから、ものづくりではないものに経済が移ってきているということです。それはサービス化であったり、知識集約型であったり、さらにはデザイン志向、文化・芸術・アート志向であったりするわけです。かつては目に見えるモノをつくっていれば、それが価値を生み出しているということであったわけです。そのため、高速道路をつくり、新幹線をつくり、製造業を誘致しというのが典型的な地域開発のスタイルだったわけですが、それらが日本社会の変化とミスマッチを生じてしまう。すなわち、経済の価値の源泉が変わってきて、それが無形化しつつあるわけです。それは、無形資産というキーワードが急速に出てきたということとも平仄が合うわけです。

〔「非物質化」とものづくり、製造業〕

そういう意味では、生産というものも変わってきたと思います。工場労働者がラインで組み立てているようなことが典型的なものづくり、モノの生産ということになりますけれども、現代社会においては、生産といった場合に非物質的な価値をつくることのほうがより重要になってきました。クリエイティブなものをつくる。当然、プラットフォームというものでビジネスをやっているGAFAなどが想起されるわけです。彼らは、一切、モノをつくっていないですよね。グーグルは一切ものづくりをしていません。しかし、膨大な価値を生み出しているわけで、一体この差は何なのだろうかということです。

こうした変化は、GAFAのようなデジタル企業だけではなくて、あらゆる産業に表れています。このスライドの1番下に書きましたが、製造業もサービス化しています。あらゆる製造業が、自分たちが単にいいものさえ作っていれば、モノが売れるということではなくなっています。もちろんモノは売るんですけども、モノを売った後に、それを買ってくれた顧客と常時つながり、彼らにモノを媒介としたサービスを提供することによって収益を獲得することに注力するようになってきているわけです。

「非物質化」とものづくり、製造業

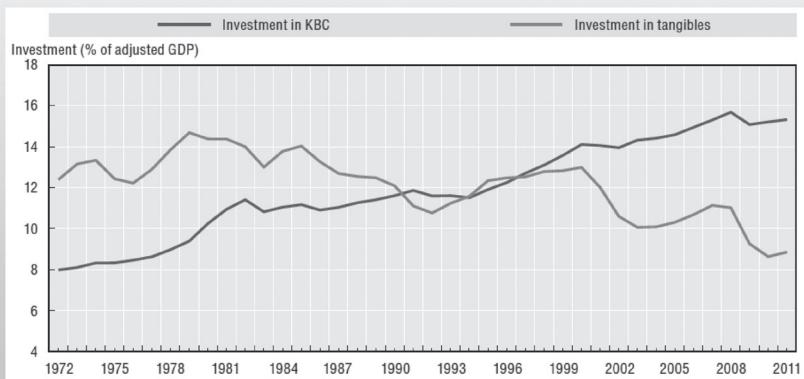
- 「非物質主義的転回」…肉体労働や機械設備による物的生産から、知識と無形資産による非物質主義的な生産を中心とする経済への変化
 - 「デジタル化」は、その中核的要素
- 「ものづくり」は重要だが、それだけで実現できる経済的価値は低下の一途
 - 製品・サービスに占める「非物質的要素」の価値は増大の一途を辿っている
- 「非物質化」は、消費・労働・技術のあり方全般を覆い、経済・産業構造の不可逆的に変化させる
 - 製造業のサービス産業化

なぜなら、そちらのほうが得られる価値が大きいからです。

[マクロ経済における「非物質化」]

そのような変化を懐疑的に見る方がおられるかもしれません、実際、アメリカを例にとってみれば一目瞭然です。ずっと右肩上がりとなっている線が無形資産投資です。有形資産投資は右肩下がりで、見事に二つが1990年代に交錯しているわけです。以後、その差は開く一方です。

マクロ経済における「非物質化」



【出所】OECD (2013), p.24, Figure 0.1.

翻訳：上部左 無形資産への投資
上部右 有形資産への投資
左の縦軸 投資額の対 GDP 比(%)

3

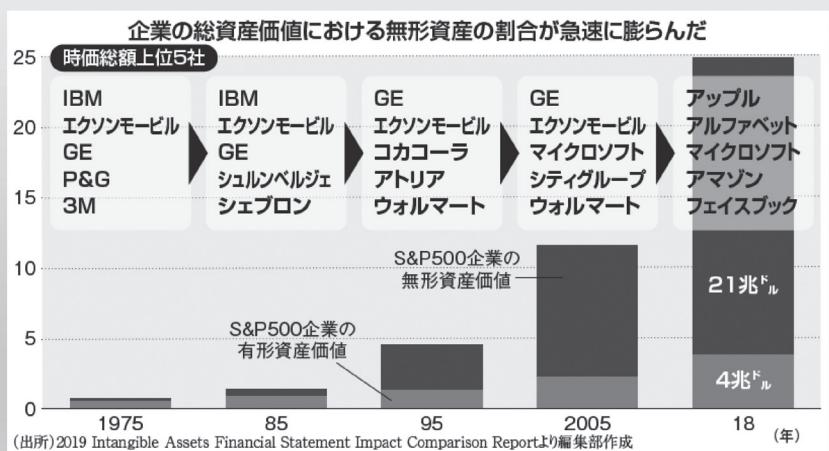
[膨大な無形資産投資が成長を生み出した]

このスライドは、いわゆるスタンダード・アンド・プアーズで上場500企業の資産価値を示しています。二つに塗り分けてありますが、下の薄いほうが有形資産価値で、うえの濃いほうが無形資産価値です。70年代、80年代までは有形資産のほうが大きかったわけですが、95年、これはWindows95というものが発売された象徴的な年ですけれども、ここで無形資産が優越し、以後、無形資産は膨大に広がり、現在、1対5になっていると思います。こうしたデータをみても、無形資産の時代になったということが分かります。

[アメリカ経済における無形資産投資の推移]

無形資産投資の推移を示しました。R&D、研究開発ですね。これは知的資産に対して投資をすることです。また、情報化資産というのは、コンピュータであったり、ソフトウェアであったり、そういうコンピュータ回りのものです。それから、ブランド価値と、きょうのお話の中心になるであろう人的資本、社会関係資本とか組織資本と呼ばれるものです。これらがすべて「無形」の資産となります。その

膨大な無形資産投資が成長を生み出した



4

米国経済における無形資産投資の推移

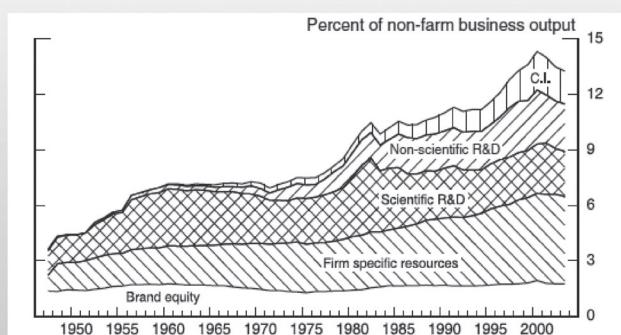


Figure 2. Intangible Shares

Note: C.I. = Computerized information.

【出所】 Corrado1, et al. (2009), p.673, Figure 2.

翻訳 : C.I. 情報化資産

Non-Scientific R&D 非科学的R&D

Scientific R&D 科学的R&D

Firm Specific Resources 企業特殊的な資源(「人的資本」+「組織構造」)

Brand Equity ブランド資産

5

ため、工場を造り、モノを作ればオーケーという時代は終わりました。アメリカ経済の変化が示す通り、世界は膨大な無形資産の時代になり、その蓄積の厚みが価値を生み出す時代になっていて、その変化に日本は気づくのが遅れたわけです。例えば関西でもそうなんですが、パナソニックとかシャープは、つい最近まで大阪湾岸に巨大な液晶テレビの工場を造っていましたが、目論見は外れてしまいました。そ

ういう時代ではもうなくなってきたいるわけです。

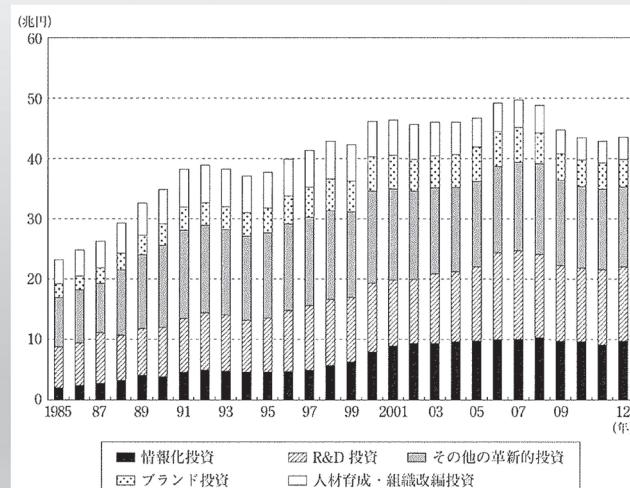
[無形資産投資が停滞する日本]

[日本の無形／有形資産投資の対GDP比推移 (%)]

ところが、日本は図の通りで、無形資産投資が停滞をしており、有形資産投資との逆転も起きていないという状況です。

無形資産投資が停滞する日本

図 2-3 日本における無形資産投資の推移



[出所] 宮川他(2016), 24 頁, 図 1-2.

6

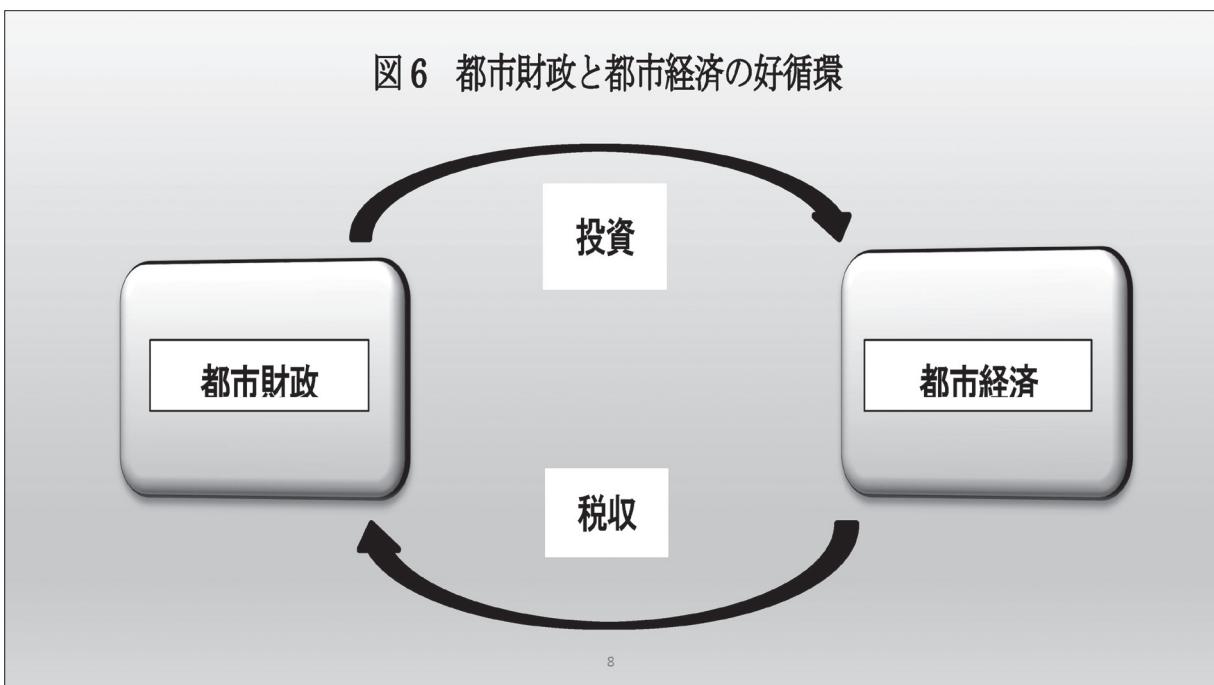
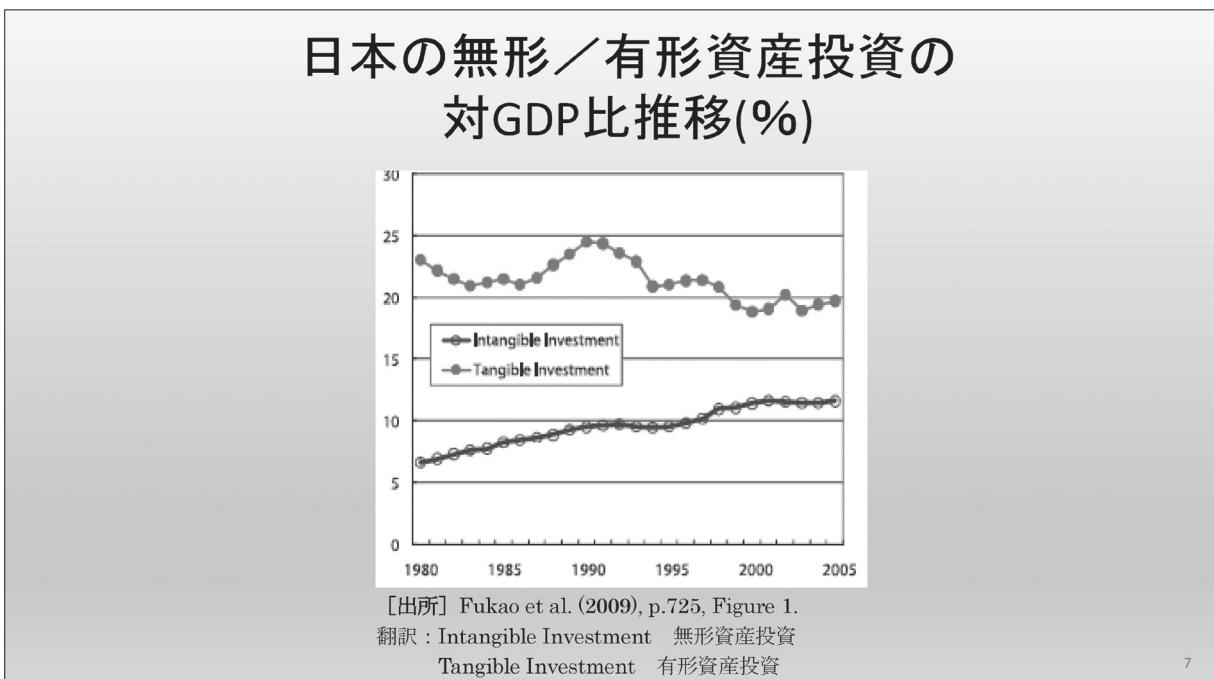
[都市財政と都市経済の好循環]

話を地域のほうに向けていきます。図では、都市と書いていますけれども、都市を地域と読み替えていただいても構いません。地域に投資することによって経済成長などのリターンを期待するわけです。今までの投資は、冒頭お話ししたように、モノであったり、工場であったり、インフラであったり、それによって地域経済を豊かにして、その一部が税収で上がってくる、という好循環を描こうとしてきたわけです。しかし、このモノに投資をしていることが地域の人たちの需要とミスマッチを起こしていて、思うように発展に結び付いていきません。そのため、若い人、とりわけ女性が定着してくれないとということになります。やはり、どこか、方向性が違うのではないだろうかということです。

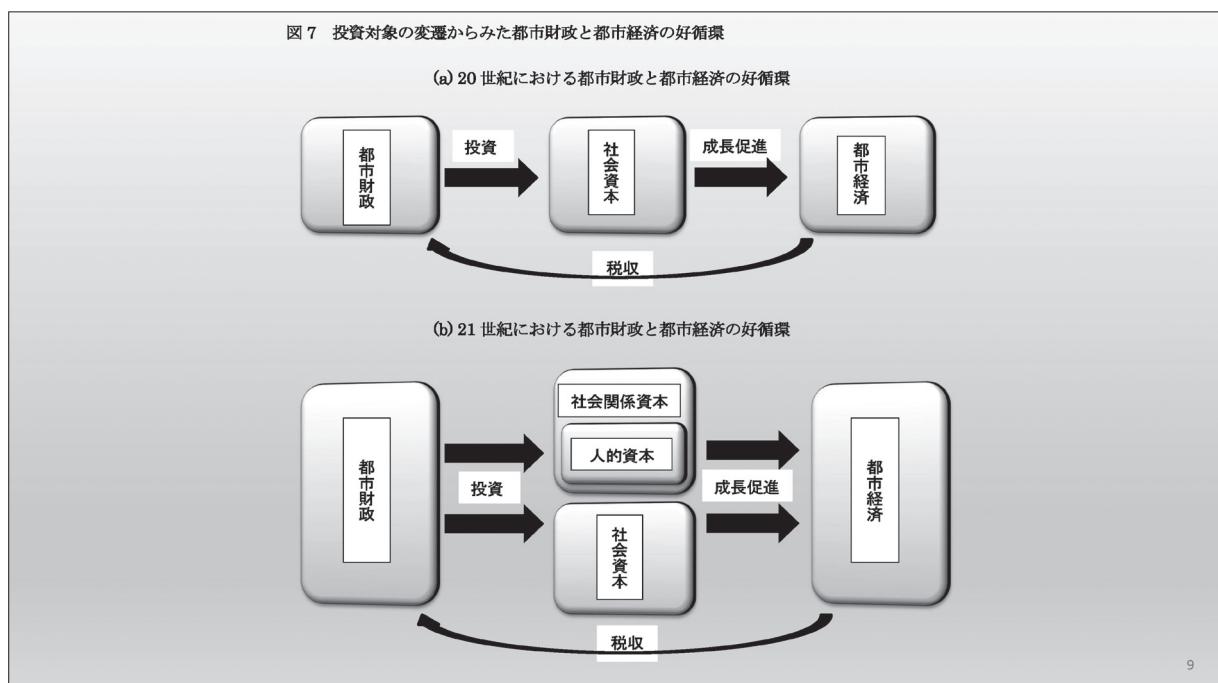
[投資対象の変遷からみた都市財政と都市経済の好循環]

それは、今申し上げたような経済の非物質化に地方の地域経済が対応し切れなくなってきたることが原因なのではないかと考えています。地域に行けば行くほど、ものづくりあるいは農林業の比率が高くなりますけれども、今、農林業ですらデジタル化が模索されるようになってきています。

これからは、この（b）に21世紀における都市財政と都市経済の好循環と書かれているように、従来の目に見えるインフラの社会資本はもちろん大事ですが、それを整備するだけではなく、どう使いこなして地域を発展させるかが重要になってきます。この点では、人的資本、社会関係資本の蓄積に意を注がなければ地域を発展させることができないと思います。これから新しいビジネスを立ち上げていくと



きに、必ずしもものづくりではなくていいと思います。そのときに何が価値を生み出すかということを地域でそれぞれ考えていかなければなりません。無形資産の時代は、人的資本こそが価値を生み出すということに、我々は留意していかなければいけないと思います。当然、人に対してどう投資をするか、これが決定的に重要になってきているということです。



9

[何が重要か？]

私はいろんな地域でお手伝いをしており、とくに環境エネルギー方面でお手伝いをすることが多くなっています。例えば再生可能エネルギーをビジネスしていくにしても、小水力発電であれば、堰堤をしっかりと造って、発電機を据え付けて、こうしたハードな面はすごく大事なんですけれども、それだけでは成功しない事例を数多く見てきました。

結局、そのビジネスを経営できる人材が必要です。それから、地域の人たちをまとめて、一つの方向へ向くように組織の求心力を高めて、地元の金融機関とも連携を図り、役所とも協力を取りつけて進めていける、そのような人材がいないことがビジネスを難しくしているわけです。

こうした意味から、人的資本、それから地域の協力関係、これをいかに構築するかということが、とりわけ重要なのだということをお話しさせていただき、私の話はひとまず終わりにさせていただきます。

何が重要か？ 自然資本・人的資本・社会関係資本

- ハード(ハコモノ)よりも、ソフト(知識、情報、制度、ファンスなど)が決定的に重要
- ハードを活用したビジネスを担える知識とビジョンを持った人材(「人的資本」)の育成・獲得が重要
- ビジネスを支える人的ネットワークと協力関係の厚み(「社会関係資本」)が地域密着型ビジネスの成否を左右
- 資金調達手法の重要性(特に地域金融機関の役割的重要性)
▶人的資本と社会関係資本への投資も必要

10

(藤波) ありがとうございます。

少しだけ諸富さんに確認したいことがあるんですけれども、先ほどWindows95が出た年が象徴的で、そこから無形資産が増えていくアメリカ経済というような話をされました。95年というのは、日本はバブルの処理に追われていて、そうした世界の潮流に気づくのが遅れたということなのでしょうか。その間にアメリカが世界の経済大国としてそういった地位を固めてしまった、と理解すればよろしいのでしょうか。

(諸富) 二つあると思います。藤波さんがご指摘いただいた、やっぱり負の処理に注力せざるを得なかったということが、前に向けて何が次に必要なかというところに割くエネルギーを奪っていたというのはあったと思います。お金もそうです。お金も、とにかく不良債権の処理に充てなければいけなかつた。これは非常に多くのものを失った10年だったというように思いますが、一方で、やはり製造業で成功したがゆえにという部分があったと思います。次に必要になるものがまさか無形のものになっていくということに気づくのが遅れたということは、確かにあったと思います。この時期に、ITの導入は進みましたか、よく言われるように、それをコストダウンや時間効率を上げるための道具として受け取った。それが新しい価値を生み出すため、新しいものを生み出すための道具なんだということに気づくのが遅れたという点も非常に重要なポイントだと思います。

(藤波) ありがとうございます。

続いて、西村さんから10分間プレゼンテーションをしていただきたいと思いますが、今の諸富さんのお話を伺いしてみると、社会、とりわけ経済の構造自体が大きく変わってきたいるんだというご指摘だったと思います。ものづくりで発展してきた日本が低成長に甘んじているということが、まさにそれを表しているのだと思いますが、実際、地方で暮らし、教育活動をされている西村さんの実感として、